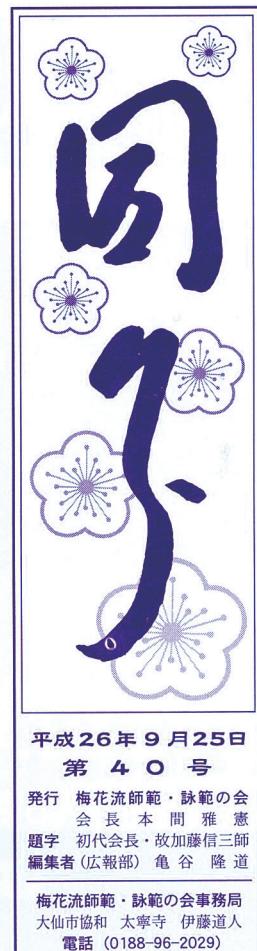


いのちめぐみ  
大地をば  
豊けき根をはり さえゆく  
樹木は我が身ぞ ひとりみなり  
青きは古をこえ 今をこゆ



山形県鮎川村のトトロの木（小杉の大杉）



秋田県梅花流師範・詠範の会会長 本間 雅憲

大気の状態が不安定：この言葉を聞かない日がないくらいこの夏は天候不順でした。夏台風の襲来、長雨と集中豪雨による水害、土砂災害は日本中に大きな爪痕を残しました。特に広島市を襲つた大規模な土砂災害は最も悪のものとなりました。被災地の一日も早い復旧復興を願うとともに、被災された方々に心よりお見舞い申し上げます。

さて、平成二十六年度の梅花流秋田県奉詠大会が開催されました。七月十三日に湯沢文化会館を会場として中央・県南地区大会が、また、七月二十六日には能代市二ツ井町総合体育館を会場として県北大会が催され、無事円成いたしました。

両会場では、大本山總持寺二祖峨山韶碩禪師六五〇回大遠忌予修法要も執り行われました。峨山禪師ゆかりの大悲真読、そして峨山禪師讚仰御和讃をお唱えし、その御遺徳を偲び御供養させていただきました。

この度の奉詠大会に大勢の方々に参加・登壇いただき誠にありがとうございました。また、大会運営に御尽力くださいました役員の皆様方、両地区の近隣の御寺院様・御寺族様に改めて御礼申し上げます。中央・県南大会は、特に県南地区の皆様方にも梅花流詠讃歌に親しんでいただきたいとの想いから、大曲「横手」湯沢と三年続けての開催を進めてまいりました。この願いが梅花の蕾となり、花ひらくことを期待してやみません。

## 奉詠大会を終えて

# 『結んだ梅花流』



でホテルに到着  
二十九日早朝  
大会会場の島根  
県立浜山体育館  
「カミアリーナ」  
へとバスで向か  
いました。  
いつもながら  
開会式には言葉  
で言い表せぬ厳  
肅な雰囲気に包

今年の全国奉詠大会は、神々が集う出雲の国（出雲大社や石見銀山が有名な）島根県にて開催されました。本来なら平成二十二年度の開催地でしたが、新型インフルエンザや東日本大震災の影響で今年までずれ込み、待ちに待った大会がありました。

大会では、二祖峨山禪師様の六百五十回忌予修法要や岩見神楽の清興、今春皇室の方と婚約された出雲大社の宮司様も来られて、まさに縁結びの神様の祝福も頂いた感動の大会となりました。

今回、秋田県より参加され登壇奉詠の詠題司を務められました安保さんにその感想を寄稿して頂きました。

長年寺梅花講員  
安保シマ

去る五月二十八日、私達県北梅花講員は大

予修奉詠

明年御正当を迎える大本山總持寺二祖峨山  
禪師六百五十回大遠忌奉詠が行われました。  
「二祖峨山禪師讚仰御和讚」一・二」を全員  
でお唱えしました。

「石見神楽」心に強く残りました。すばらし  
い感動ありがとうございました。

「石見」  
清興

「浄心」で静座し、閉会式の言葉に続いて  
「まごころに生きる」を大合唱して幕を閉じ  
ました。大会会長宗務総長様、関係者各師の  
心配りと講員の熱意ですばらしく盛会な大会  
でした。



「梅花流全国奉詠大会に参加して」

まれ、献灯、献花の緊張した面差しの幼稚園児。開会の言葉に続く「三宝」「高嶺」の奉詠。般若心経の読経、回向は大会を盛り上げ身も心も引き締まる思いがしました。そして管長禅師様との相見、御垂示は誠に有り難いことで大会に参加出来た幸せを実感いたしました。練習なしのぶつけ本番でした。緊張の中心を込めてお唱えいたしました。ほつとした瞬間、同行同修の心の結びつきであること、講員としての誇りと喜びが満ち溢れ、この感激は忘れない出来ない思い出となり

# 「出雲の国で、縁」

私達一行は皆さんにお別れを告げ、出雲大社参拝へと向かいました。縁結びの神様大国主の大神を祀る出雲大社に参拝出来た幸せを胸に秘めてホテルに到着、温泉につかりゆっくり休みました。

三十日は観光と見物でした。松江城、明々庵、小泉八雲記念館、足立美術館（横山大觀コレクション）（日本一美しい庭園）静寂の境内を見学し、一路「はわい温泉」（鳥取県）に向かいました。夜は歌あり、踊りあり、宴会も賑やかな大変楽しいひとときでありました。

三十一日は県南の皆さんとお別れし、鳥取砂丘を見学後、鳥取空港羽田経由で無事帰路に着きました。講員が四日間一緒に楽しく和やかに過ごすことが出来、大変意義深い思い出として心に残る大会旅行だつたと思います。

皆さんありがとうございました。又、家族に感謝し今後も梅花に精進の日々を送りたいと思います。



スサノオがヤマタノオロチを退治する

## 県北奉詠大会

### 感動と、出会い、ありがとう

樹温寺梅花講講員  
中島ナツエ

平成二十六年七月二十六日、県北地区梅花流秋田県奉詠大会の日に、あんなにも感激な時をいたぐとは、私にとって忘れる事はできません。

事終わりました。

その後、リラックスしながら水を飲み、ゆっくりしております。と、その時一人の方丈様が私の名前を言つたと思いました。その先是何にもわかりません。緊張して舞台までは行きましたが、「緊張とは本当に大変な事」に気が付きました。

いつも足が悪く、杖をはなす事がないのに、杖もなく歩いていたのです。方丈様の前に立ち、有り難いお言葉をいただきました。

私は何も出来ないので、これも梅花の皆様のおかげと思って感謝しております。これからも健康に気を付けて、皆様のお力を借り梅花に励んで行きたいと思っております。



御年90歳にて詠頭、表彰される

今年も私達は宝勝寺様、永安寺様、樹温寺の三か寺で登壇です。今年は選曲、詠題師、詠頭師の当番に当たりました。七名の

講員で頭をひね

有り難うございました。

り考えました。

選曲「盂蘭盆会御詠歌」に決めました。お寺の奥さんが「中島さん、今年はご主人の二十七回忌にあたっていますし、御供養の為にも詠頭師をやつてくれないかなー」と言われました。私は足腰も悪く、大会も無理と思つておりましたが、頼まれた以上は「頑張るしかない」と思い、毎日お唱えとヒザを折る練習に励みました。

当日、緊張しながら舞台に立つて、無事終わりました。

その後、リラックスしながら

梅花のふるさと

～詠讃歌の生まれた風景～

（その十八 高祖承陽大師道元禅師入寂御詠歌）

# 最期の教え 最晩年の道元禅師――え

様が臨終の間際に、悲しみの涙に暮れる弟子達のために語った言葉を経典にまとめたものです。この涅槃に臨むお釈迦様の心情に託して、禅師はご自身の最期の教えとされたのでした。

この時のようにすを伝える絵図には、こちらを向いてお話しされる禅師と、あふれる涙を袖で抑えながら聞き入る弟子達の姿が描かれています。

## 高祖承陽大師道元禅師入寂御和讃

琴弦すでに絶ゆれども

遺教の恵み深くして

正法眼蔵とこしえに

人の世照らす光なり

堀口義一作詞

これから二回にわたって道元禅師の最晩年のことを綴つてまいります。

### ◇最後の『正法眼蔵』◇

道元禅師がどのようなご病気で亡くなられたのか、はつきりとはわかつていません。ただ記録によれば、その病いのために着てある衣にまで血がしみ出してきて、弟子の懷奘はその血を拭き取つた布地を洗い、継ぎ合わせて自分がかけるふだんのお袈裟にしていたと伝えられています。また俗人として道元禅師を支えた波多野氏は、後年右手に腫れ物が出来た時、「うれしいことだ、これで私

年が明けて建長五年の正月六日、道元禅師は最後の『正法眼蔵』の講義を行いました。『正法眼蔵』とは禅師が弟子達に対し説いた教えをまとめたもので、『法華經』などの經典を解説したり、中国の禪宗祖師の言葉を紹介してその意義を解説したり、また修行僧堂の日常の生活がすべて仏の修行であると教えたり、折りおりに取り上げた題材から、自在に仏教の真意を明かしたものでした。禅師ご自身や弟子達の筆録したものを合わせ、百巻近くになつていました。

ご自分の体調をかんがみて、残された時間の少ないことをさとつた禅師は、この時の講義が最後のものと認めていたのでした。最後の『正法眼蔵』にとりあげたのは、お釈迦様の最後の教えとして名高い『仮遺教經』でした。このお經は、お釈迦



「仮遺教經」には大事な八つの教えが記されています。禅師はそれについて講義されたので、この研究者もいます。いずれにしても大変つらい症状だつたことがうかがわれます。建長四年の夏にはその症状が現れ始め、暮れの十二月にはご自分で筆を執ることが出来なくなっていました。

年が明けて建長五年の正月六日、道元禅師は最後の『正法眼蔵』の講義を行いました。『正法眼蔵』とは禅師が弟子達に対し説いた教えをまとめたもので、『法華經』などの經典を解説したり、中国の禪宗祖師の言葉を紹介してその意義を解説したり、また修行僧堂の日常の生活がすべて仏の修行であると教えたり、折りおりに取り上げた題材から、自在に仏教の真意を明かしたものでした。禅師ご自身や弟子達の筆録したものを作らせ、百巻近くになつていました。

ご自分の体調をかんがみて、残された時間の少ないことをさとつた禅師は、この時の講義が最後のものと認めていたのでした。最後の『正法眼蔵』にとりあげたのは、お釈迦様の最後の教えとして名高い『仮遺教經』でした。このお經は、お釈迦

のである。こうして出会えた以上は何度でも生まれ変わり、繰り返しこの教えを学び、いつか必ず無上の悟りに達して、世の人びとのためにこの教えを伝えよう。釈迦と同じように（意訳）

お釈迦様はこの世に生まれ出る以前、数限りない生を繰り返し、他の多くのいのちのために自分のいのちを犠牲にし、真実の教えを求めるために苦行を続けて、ついに人々を救う仏陀となるためにこの世に生まれました。禅師の最後の言葉はこうした仏伝信仰をもとにしていたと思われます。

そして禅師も、生がここで終わるのではなく、自分もまた生まれ変わり、一層仏の教えの学びにつけめようという気持ちが読み取れるようです。

後日、この教えを清書することになった懷奘は、文章の最後に次のような添え書きをしていました。

「亡き道元禅師を恋い慕うものは、必ずこの『正法眼藏八大人覚』を書き写して護持しなさい。『八大人覺』は釈迦の最後の教えであり、同時に道元禅師の最後の教えなのです」と。

これ以後、禅師は著述活動を休止されています。おそらくは病床に伏せる日々が続いたのではないでしようか。

### ◇ 悔いのない人生 ◇

『正法眼藏八大人覚』以後の道元禅師のようすは、弟子の義介に關わる資料『御遺言記録』の中に登場してまいります。それは次の条です。

「七月八日、道元禅師の病状が重くなり、義介は

驚いて禅師の寝所を訪ねた。

禪師が言う（義介よ、こちらに来なさい）

義介は禅師の右そばに進み寄った。

禪師が言う（今生の寿命は、この病気できつと最期だろう。人の命には必ず限りがある。だがそれは言つても病の進行に任せて放つておくわけではない。だから日頃から私もずいぶん人に助けてもらひ、あれこれと治療してもらった。だがまたたく回復しなかったのだがこれまた驚くに当たらぬ）。今生のうちに、仏の教えについて明らかに出来なかつたことは千万もある。しかし仏法を学ぶ上で邪見を起ことが一度もなかつたことを悦びとしたい。まさに正しい教えに従つて、正しい信仰に生きることが出来たのだ）（意訳）

こうした言葉から、禅師はすでにご自分の死を覚悟しているようすがわかります。しかし自分の

『御遺言記録』

同七月八日御病重増々 義介は参

拜

堂頭和尚云ふ汝近來義介近前右邊

示す今汝壽命は病世人限凡人ノ壽命

必有限然而非可仕ナ病目ニ被厄も極致

随分合力人被は加醫療雖然全不平愈

又不子驚但今生お如東佛は觀有未明

知々千万猶心お佛は一切不立邪見正矣

生涯は眞実の仏法信仰に生きたのだという自負もまたここにうかがうことが出来ます。

### ◇ 義介へのことば ◇

道元禅師は続けて、永平寺は仏法を行ずるには勝れた地であるから、ここを大切に守つていってほしいと義介に託しています。

（お前は永平寺に身を寄せる事長年に及んでいる。またわが一門の中では先輩格である。たとえ私が死んだとしても、寺院を保ち、僧俗協力して私の仏法を守つていってほしい。もしこのたび外出することがあっても、またここに帰ってきたならこの寺の居住はお前の思うに任せてよい云々）

義介は涙を落とし、悲しみ、泣きながらかしまって言うのだった。

（寺のことも私のことも、今後のことについては一切ご意向にそむきはいたしません）

（最も私の願うところだ。私は以前からお前を見ているが、世間の道理もよくわきまえ、仏法においても非常に道念がある。みなその情熱を知っている。ただ老婆心に欠けるところがある。しかし

それも自然に歳を重ねていくうちに必ず備わつてくるだろうよ云々）

義介はその言葉に、涙を押さえて恐れ入るばかりであった

道元禅師の後、永平寺の二代を継ぐのは懷奘ですが、このように義介に対しても大きな信頼を寄せていました。

# 「禅」の教えと「梅花」の調べ

県南奉詠大会(湯沢にて)

## 「禅と梅花の大会」に参加して



第一教区源正寺

村 松 文 子

から補陀寺様が参加して下さいました事はうれしい限りです。

第一教区の梅花講の数も

講員数も寂しくなりつつある中、千葉県から奥様が駆けつけて下さいました。山

内の若きホープ永松さん、檀信徒の皆様総勢十四名の方々が登壇して下さったことは、本当に心強くお唱え

もグーンと深みを増し、よい出来映えだったと思いました。例年の大会では直前の合同練習があり、道人先生ご指導のもと、詠題、詠

頭をお唱えの方々とすり合わせをして大会に臨むのですが、今回は都合によりできませんでした。でも会場に向かうバスの中で

乗福寺様の奥様からアドバイスをいただきながらの練習は皆様の結果を一段とよくして下さいました。



をお唱えしている總持寺の修行僧の方々のお姿が鮮やかに脳裏に蘇るようでした。又、

師範の先生方による禅師様の讃仰の御和讃と御詠歌のお唱えも、男性のみのすばらしいハーモニーを聞けて至福のひとときでした。最期に青山俊

董老師の「悔いのない人生」のお話では「この地上に住む

一切のものが大空という屋根の下、大地という床の上に住む兄弟仲間じゃないか」とい

う横山祖道老師のお言葉のあまりにもスケールの大きい一

体觀に圧倒されました。話は続いて、それにひきかえ、すばらしい講演を聞いた後のお姑さんとお嫁さんの感想のお話では、現実のせせこましい人間社会を見せつけられた思いでした。どんなすばらしいお話を聞いても

今回大本山總持寺二祖峨山禪師様の六百五十回大遠忌予修法要が修行されました。法要に先んじて地蔵院様の奥様のステキなお声でのナレーションがあり、会場の皆様も聞き入つておりました。そして「大悲真読」という聞き慣れないお経がありました。峨山禪師様が毎朝片道五十二キロの険しい山道を羽咋の永光寺から輪島の總持寺に走つて向かわれから輪島の總持寺に走つて向かわれたひたむきなお姿と、禪師様

の到着を待つてゆつくりお経

をお唱えする總持寺の修

行僧の方々のお姿が鮮やかに

脳裏に蘇るようでした。又、

師範の先生方による禅師様の讃仰の御和讃と御詠歌のお唱えも、男性のみのすばらしいハーモニーを聞けて至福のひとときでした。最期に青山俊

董老師の「悔いのない人生」のお話では「この地上に住む

一切のものが大空という屋根の下、大地という床の上に住む兄弟仲間じゃないか」とい

う横山祖道老師のお言葉のあまりにもスケールの大きい一

体觀に圧倒されました。話は

続いて、それにひきかえ、すばらしい講演を聞

いた後のお姑さんとお嫁さんの感想のお話では、現実のせせこましい人間社会を見せつけられた思いでした。どんなすばらしいお話を聞いても

聞く人が自分のこととして、受け止めるアンテナを常に張つていなければその人の心に届かず他人事になつてしまふ。そのことに心しなければならない事を気付かさせていただきました。

今回で宗務所長様の発願である県南にも梅花の輪が広がつてほしいとの想いが大曲、大森、湯沢会場で一区切りしますが、一輪でも咲いてくれたことは何よりでした。

皆様お疲れ様でした。

合掌



最禅寺副住職

森 田 昭 善

七月十三日に、湯沢文化会館で開催されました『禅と梅花の大会』に参加させ

ていただきました。この度の大会は、大本山總持寺二祖峨山韶碩禪師六百五十回大遠忌予修法要も行われ、私は地元であります湯沢の地で開

催されたこの縁に、大変尊い想いで参加することができたと思っております。今回の予修法要においては、大悲真読という大変ゆつくりとした御経を唱える為に、湯沢雄勝地区の正法会におきまして何度も慣らしをさせていただきました。

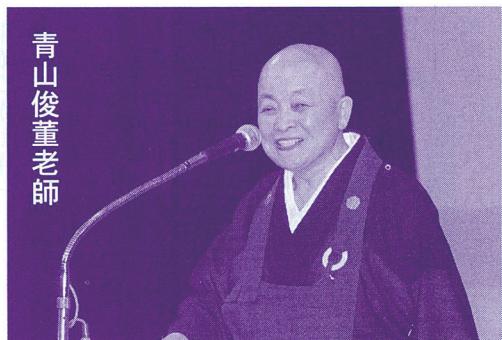
た。私自身大本山總持寺にて安居させていただけおりましたので、御本山の毎朝の朝課のお勤めでは読經しておりましたが、送行後はなかなか唱えることもなかつたものですから、改め

て新鮮な気持ちで唱えることができたのではと感じております。来年は、正当法要がございまが、この度のこの新鮮なる気持ちと、峨山禪

した記念講演がございました。御老師の経験豊かな貴重なお話は、私も含め来場された皆様の心に尊く響いたと思います。

今回、この大会にて、縁をいただき、ステージにおいてもお勤めすることができました。そして、どの場面においても、響きを感じさせていただきました。この響きを大切に今後とも益々切磋琢磨し、精進させていただきたいと痛切に感じることができた一日でありました。深く感謝申し上げますとともに、祖師様方のみ教えや、梅花流詠讃歌が広く深く響き渡ることを冀うところでございます。

ひとつの良き刺激をもたらしたのではないでしようか。恥ずかしながら私も御詠歌の取り組みを疎かにしておるのですが、参加した檀家様からも、すばらしかった、また聞きたい等のお声が聞こえてきたのは事実であります。また、引き続き、青山俊輔董老師を講師に迎え、「悔いのない人生」と題



師様への報恩感謝  
の気持ちを胸に  
益々来年に向け自  
己の想いを高めて  
参りたいと思つて  
おられます。

おらほの梅花講

じ しょう ざん  
自 性 山  
まん よう じ  
萬 養 寺

住所 鹿角郡小坂町  
設立 昭和五十五年  
講長 小田桐 昌善  
講員 十二人

お正月や春秋彼岸法要でのお唱え  
三仏忌や両祖忌、両祖降誕会、観  
音様やお地蔵様への奉詠等々。奉  
詠の後は五分間坐禅と坐禅御詠歌  
も欠かせません。

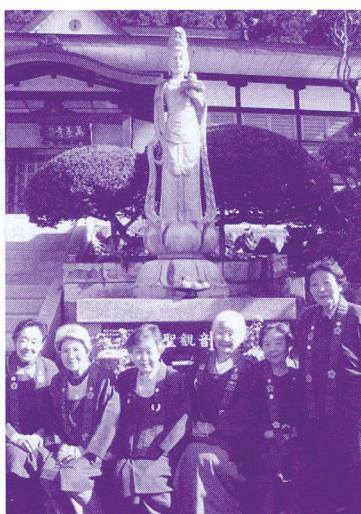
小豆粥を手のひらに貰い、住職のチンの合図でペロリと頂き、その後はカレー味の五目汁や小豆粥、各自持ち寄った漬け物やデザート等、沢山のご馳走がテーブルに並びます。話に花を咲かせ笑い、食べべ、和氣あいあいと一日を過ごします。

その他、お通夜に呼ばれての御詠歌でのご供養、四十年程続く地区の老人会のお盆供養会での盂蘭

たり、地域やお寺の為に一生懸命活動していたのが懐かしく思います。

当山の梅花講は、当初有志の方々がお隣仁叟寺様梅花講に参加し練習を重ねておりました。その後菩提寺にも梅花講が欲しいとの熱望から昭和五十五年の設立となります。

最盛期は二十数名を数えた講員さんも多くがお唱えを浄土の世界へと遷され、現在は十数名となり、しかも平均年齢も七十五を超えて寺に集まるのも一苦労と、常時集まる講員さんは四、五名となつてしましました。それでも少数精銳の旨下しは、毎月八の付、日の東



盆供養御和讚も三十年以上続けています。

出し、梅花講の仲間と笑い語らい支えられ、日々仏行を積まれたのが健康で長生きの秘訣かも知れません。

当梅花講も他の梅花講同様、山門行事と密接な活動をしています。

ん。練習の後はお茶やお菓子。山門行事、例えば成道会の時は、お釈迦様から頂戴した五味粥ならぬ

少数とはいえ熱心な活動の源は  
終わつてからの親睦かも知れませ  
います

支えられ、日々仙行を積まねばの  
が健康で長生きの秘訣かも知れま  
せん。

